

介護職が実践する看取り介護と介護職の特性 —特別養護老人ホームにおける実践の分析結果から—

○ 大阪市立大学大学院 小松 亜弥音 (8694)

キーワード3つ：看取り介護 介護職 特別養護老人ホーム

1. 研究目的

少子高齢化の進む現代日本において、高齢者の終末期をどこでどのように支えるかは喫緊の課題である。特別養護老人ホーム（以下、特養）は、2006年の介護保険制度改正で「看取り介護加算」が創設されるなど、高齢者の終の住処として注目されつつある。特養において高齢者の日常生活支援を主に行うのは介護職であるが、これまでの特養における看取り介護に関する研究はその大部分が看護師を対象としており、介護職に焦点を当てたものは多くない。また、介護職の日々のケアの重要性や、看取り介護ならではのケア技術の重要性が指摘されているものの、その具体的な内容は明らかになっていないと断言は難しく、先行研究の中でも量的調査で用いられる看取り介護の具体的なケア項目は、主に看護分野の先行研究を参考にして研究者が独自に設定した項目が主であり、介護職の考える看取り介護がそもそも項目から排除されている可能性がある。これらのことから、先行研究から得られた結果は「医療施設とは異なる福祉施設における看取り介護の実態を十分反映しているとは言い難い」小山・水野（2010）のものであるといえよう。したがって、介護職による看取り介護実践の具体的な内容や、そこでの介護職の特性とは一体どのようなものなのか、福祉・介護の視点から質的な研究を行う必要があると考える。

2. 研究の視点および方法

本研究の視点は、特養での看取り介護を実践する介護職の語りを質的に分析することで、介護職が実践している看取り介護の具体的な内容、及び看取り介護実践での介護職の特性を明らかにすることである。

研究対象は、特養において看取り介護を複数ケース経験したことがある、経験年数5年以上の介護職員と設定した。高齢者福祉の研究者より看取り介護を行っている近畿圏の特養の施設長1名を紹介して頂き（機縁法）、前述の条件に合う職員3名を選出してもらった。2014年10月から11月にかけてグループ・インタビューを計3回実施した。インタビュー方法は半構造化面接法を用い、インタビュー内容は対象者の了解を得てICレコーダーで録音した。インタビュー内容は、看取り介護を担当した利用者について、利用者への専門的な関わりについて、特養において看取り介護を実践して良かったこと・困ったこと、などである。結果の分析は質的データ分析法（佐藤 2008）を参考に行った。

3. 倫理的配慮

研究協力依頼時に本研究の趣旨及び目的等を文書で伝え、初回インタビュー時にも調査者より直接口頭での説明を行った。調査参加が自由意思であることや、参加拒否・中断した場合において不利益を被らないこと、またデータは個人が特定されることのないように取扱い、調査責任者及び調査実施者のみによって厳重に保管・管理することを合わせて伝えた。発言内容や研究結果の公表に関しても了解を得た。なお、本研究は大阪市立大学大学院生活科学研究科倫理委員会において承認を得ている（承認番号 14-28）。

4. 研究結果

介護職の看取り介護実践として、8つのサブカテゴリーで構成される【利用者の最期を支えるための具体的なケア】、3つのサブカテゴリーから成る【家族が利用者を見送るための支援と看取り介護への活用】、2つのサブカテゴリーから成る【他職種と協働で行う対応】の3つが抽出された。また、介護職の特性としては、実践の中で利用者・家族に対する複雑な思いを抱えていることや自身の実践に対する肯定・否定両方の感情を持つこと、実践する際に様々な経験をしながら気づきを得て、それを実践に活かすというサイクルを繰り返していること、そして自らが目指すべき理想ともいえるような看取り介護に対する考えを持っていることが明らかになった。

5. 考察

介護職の看取り介護実践の具体的な内容と介護職の特性について、先行研究の結果を裏付けるものだけでなく、先行研究の結果には見られなかった新たな要素も見出された。まず、介護職が経験の中で形成する【看取り介護利用者像】での利用者の苦痛や状態の捉え方が、利用者からニーズを直接聞き取ることができない場合に、実際に行われる看取り介護実践の根拠となることが示唆された。中でも〔経験から推測される利用者のストレス〕というサブカテゴリーは、看取り介護という場面においても介護職が利用者の強みを見出していることを表している。次に、介護職が利用者の死に対して、〔家族には敵わないとする一方で家族より身近になりたいと願う矛盾した思い〕を持つことが明らかになった。家族よりも身近な存在になりたいという思いが利用者への積極的な看取り介護の実施につながる一方で、家族には敵わないのだという思いが積極的に家族を利用者支援に活用することに繋がっていると考えられる。そして、看取り介護場面において介護職は自分たち自身を〔利用者や家族と心理的・物理的に身近である〕、〔他職種よりも少し利用者に近い〕と捉えていたが、このことは介護職が〔人としての役割や尊厳を尊重すること〕や〔利用者の望みや願いを可能な限り実現しようとする〕ことを実践すべき看取り介護とすることや、実際の看取り介護実践においても〔医療的に制限されているニーズの充足〕を行っていることの原因力になっていると考えられる。